琉球大学学術リポジトリ

琉球国時代の和文・漢文を活用した授業実践：「伝統的な言語文化」への興味・関心を広げる授業の試み

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西岡, 華穂子, Nishioka, Kahoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41637

琉球国時代の和文・漢文を活用した授業実践

―「伝統的な言語文化」への興味・関心を広げる授業の試み―

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻　２年
西　岡　華　穂　子（沖縄県立西原高等学校教諭）

１　はじめに

（１）現状

現行の高等学校学習指導要領（平成 21 年３月告示）に［伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項］が登場し，続く高等学校学習指導要領解説国語編（文部科学省，2010）には，教科書に所載されていない題材を教材として活用することが一つの方法として示された。沖縄県にはその素材となり得る琉球国時代に記された和文・漢文の文献が残されているが，それらを活用した実践は広まっていない。古典の学習において教材と学習者との間に時間的・空間的な隔たりがあることから生じる，学習への取り組みにくさは避けられない問題ではあるが，教科書所載の古典教材の舞台との気候・風土の違いが大きいことも原因となり，教材に描かれる自然の事物についてさえイメージを持つことが難しい生徒たちが沖縄県には多く存在する。教師は厳しい冬を乗り越えた春の待ち遠しさや錦のように映る紅葉の美しさとそれを目にする感動を口頭で説明し，生徒は想像の世界で学習するという流れになる。

（２）目的

本実践においては，琉球国時代の和文・漢文を活用した教材を開発し，古典学習を実感を伴うものにして，「伝統的な言語文化」に対する生徒の興味・関心を広げる授業を提案する。ここで言う実感を伴うとは，学習者が，その舞台を想像したり，描かれる事物に理解や親近感を持ったり，登場人物の行動や心情に共感したりすることと捉えておく。

（３）方法

①科目の設定

生徒の実感を伴う学習の教材としては，平易で親しみやすい内容である方が望ましい。琉球国時代の和文・漢文は，古文・漢文の基本に忠実な平易なレベルであることが多く，複雑な技巧もほとんど見られないことから，本実践で作成できる教材は現行の「国語総合」の範囲を越えないと判断し，高校１年生対象の古典入門の教材開発を目指すこととした。

教材のジャンルは,初学者向きだとみなされている説話的な内容のものにすることにした。

②教材の開発

教材を採る基本文献には琉球国の正史『中山世鑑』,『球陽』,『遺老説伝（『球陽』外巻）』を計画した。その理由としては，官製ゆえに琉球国の中でも相当の知識人の手に成ることから基本的知識・技能に信頼が置けること，古典学習の入門教材に適した説話的なエピソードが多く含まれることが挙げられる。教材化するにあたって，基本文献から原文・語注・読み下し文をデータ化し，適宜訓点を施して語注や解説を加えて体裁を整え，さらに口語訳を施した。また，生徒向けの学習課題ワーク等を作成した。昨年度は大学院での学修の成果として７つの教材を開発した。

③検証の方法

本実践の狙いである生徒の興味・関心が広がったかどうかを検証するために，アンケートによる生徒の意識調査と単元ごとの１枚ポートフォリオを活用した。

２　実践

連携協力校と勤務校で３単元分の検証授業を行った。Ａ高校（連携協力校，専門高校３年生対象）では,「読むこと」の授業を知識構成型ジグソー法を用いて実践した。Ｂ高校（勤務校，普通高校１年生対象）では，パフォーマンス課題を用いた「リライト活動」の授業を一学期に，導入部分の絵本の比べ読みに知識構成型ジグソー法を取り入れた授業を二学期にそれぞれ実践した。各授業でのアンケート結果や１枚ポートフォリオの記述内容の分析結果から，開発した教材による授業が，基礎的な知識・理解の習得の面で，教科書所載の教材を使用した授業と比しても劣らないことが明らかになった。また，開発した教材の地域性が生徒の興味・関心を広げるものとして有用であったとも判断できた。

３　成果と課題

（１）成果

開発した教材に関しては，基礎的な知識・理解を習得させる教材として活用できる手応えがあった。また，教材の持つ地域性を生かして教科横断的な学習課題を設定できる可能性もあり，次期学習指導要領に登場する「言語文化（仮称）」での活用も期待できることがわかった。実践した授業の手法については，アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた実践を行うことができ，高校の教育現場では一つの方法として提案できた。

（２）課題

開発した教材は，誤字・脱字や記号の間違い等単純なミスがあったり，現代語訳が洗練されていなかったりするため，教材としての質の向上を目指す必要がある。また，基本文献にはまだ教材化が可能な作品もあるので量的な面での充実も必要である。教材の中で登場する基本的な知識・理解に関する学習要素の整理を行うことで，開発者以外の教員も使い易い教材にしていく改良の余地がある。授業全体を通しては，学習課題と評価の一体化について計画の段階から十分に授業を想定しておくこと，主体的・対話的で深い学びにつながる授業を工夫することが課題として意識された。